

# 十和田市立 新渡戸記念館だより



◀松前城下台場形成略図 (江戸時代末)

松前の福山城をはじめ、大砲台場、陣屋など軍事拠点の位置、形態、規模、設置されている砲門の大きさを詳細に記す。大砲は6ヶ所の台場（黄向、馬形西、馬形東、三ノ丸、西館、立石野）と沖ノ口役所に合計16門を設置。最大の砲門は約4.5kgの砲弾を撃つ事ができた。

## 当館所蔵 盛岡藩北方警備関係資料

当館では南部盛岡藩の北方警備に関する資料を多数所蔵しています。新渡戸十次郎による下北半島の大砲台場絵図31点は、青森県立郷土館との共同調査を行い、平成12年度県立郷土館調査研究年報に目録が発表されました。北海道沿岸の大砲台場絵図28点をはじめとする関係資料についての調査が待たれます。



### 研究者も注目する資料

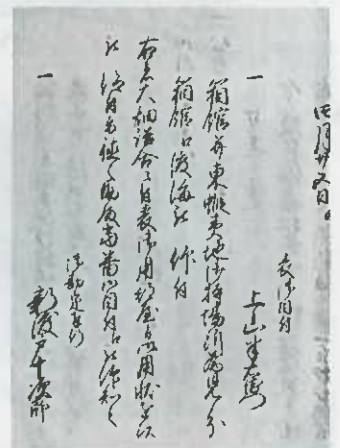
19世紀に入ると各地に外国船が出没し、沿岸警備の必要性が高まりました。嘉永7年(1854)7月幕府は松前藩領地の内、東西蝦夷地を再び直轄地として箱館奉行に警備を統括させ、安政2年春には盛岡藩をはじめ東北諸藩に蝦夷地全域の分割警備を指令しました。当時盛岡藩の勘定奉行だった新渡戸十次郎は陣場奉行として警備に必要な大砲台場の建設にかかわり、記念館にはその頃に作成した絵図、または参考とした古絵図などが多数残っています。昨年10月9日、当館を訪れた古地図研究家・高木崇世氏は、新渡戸十次郎による北海道ならびに北方四島を描いた絵図を見て、その保存状態の良さ、精密さから考えても、大変珍しく貴重な資料であるとのことでした。



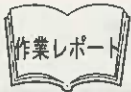
▲新渡戸十次郎着用具足。盛岡藩御具足師・菊池勇治の記録には、十次郎が松前へ渡るにあたって鎧を注文し、勇治の息子・喜助が渡航直前にそれを届けたとある。『松前持場見分帳』にも渡航時具足着用との記載が見える。

### 新渡戸十次郎の『松前持場見分帳』

安政2年(1855)4月新渡戸十次郎は表御目付・上山半右衛門とともに東蝦夷地の警備持場(箱館表山岬を主として恵山岬から幌別までの海岸地帯)見分の出張御用を拝命しました。『松前持場見分帳』は同年11月25日に任務遂行の褒美として御召御上下を拝領するまでの詳細な記録です。この資料を見ると詳細な台場建設、配備計画が、見分後すぐにまとめられたことがわかります。また10月、浪民村において御目付・上田多太治へ35件の関係書類が披露されましたが、その中には台場絵図や書類の他、蝦夷地の風土書、出張の帰りに尻労村で見分した石炭の掘り方をまとめた調査書、「異国傳馬船雛型」「西洋ヒストン 但ドントロ流(ピストルの事か)などの異国情報もあり、幅広い情報収集がなされていたことがわかります。



『松前持場見分帳』冒頭。▶ 安政2年4月25日～11月25日までの記録。



## 太素の森を守るために

# 樹木約130本を伐採

太素塚には慶応2年(1866)新渡戸傳が現在の場所と定めてから、多くの樹木が植えられました。しかし、樹木が育つにつれ、密植により樹木が弱り始めていました。そこで太素塚の森を後世に残すために、このたび大規模な伐採を行いました。

### 太素塚の森を守るための 様々な努力

太素塚の樹木の衰えについては、長年踏み固められたことにより根本の土が固くなり、根に酸素や水分が十分供給できなくなっていましたので、その状況を改善するため根本の掘り起こしや下草の植付けを行い、「森のもつ自然の力を生かした再生」を心がけてきました。特に急激な衰えを見せていた推定樹齢150年のもみじ4本については、平成8年～9年に樹木医・故 中野渡誠氏(十和田市)、齊藤嘉次雄氏(青森市)、を中心として集中的な治療が行われ、現在は毎年元気に葉を茂らせています。しかし、当時このような作業の他に、太素塚の敷地7,722㎡に約500本の樹木が茂っているという密植状態を改善しなければ、この森を未来に残す事は難しいとの指摘を、心有る多くの市民の方々や専門家から受けており、いつかは間伐をしなければならない状況にありました。



◀平成8年当時の根本掘り起こし作業の様子。根を傷つけないように丹念に掘った後、柔らかい土への入れかえを行い、樹幹注射により活性剤が注入されました。



▲間伐後の太素塚全景。日光が良く入り、根本の土を柔らかく保つ下草の繁殖にも良い環境となりました。

### 今回の間伐からわかったこと

間伐によって切られた樹木約130本の年輪を調べましたが、樹齢は約70～130年と様々でした。これは、幕末に太素塚ができてから、共立開墾会社をはじめとする地域民の事業や、国営開墾事業などでも植樹を行い、太素の森を受け継いできたことを示しています。間伐された樹木との比較から、太素塚に現存する樹木の中でも、樹齢130年を越える樹齢の木は大変少なくなってきたと思われる。未来に残すために、より注意を払って大切にしていかなければならないと感じています。



◀伐採した杉の切り株。根本は110cmの太さで、年輪から樹齢約136年と思われます。



◀「三内丸山遺跡の大柱」に使われたものと同様の大木として話題となった、幹周2.2m以上、樹高15m以上の栗は推定樹齢140年です。毎年沢山の栗を落としています。

## トビックス

### 太素塚でバードウォッチング —シメが入口ガラス戸に激突—



▲失神状態のシメ

太素塚には沢山の鳥たちが来ますが、たまにはこんなアクシデントも。1月30日の午前中、玄関の方で「パーン」という大きな音がしたのでかけつけると、シメが一羽、玄関前に落ちていました。息はありましたが、ぐったりと口を半開きにしたまま動かないので、玄関わきにタオルをひき、その上に乗せておきました。1時間後、来館されたお客様の音で正気に返り、飛び立って一安心。お客様は突然の鳥の出迎えに驚いていらっしゃいました。



シメ (♂)

特集

初代三本木原国营開墾事務所長

溝口三郎 編『兩邨 水利史談』

このたび初代三本木原国营開墾事務所長・故溝口三郎氏の編集による『兩邨 水利史談』を新渡戸館長が古書店より入手いたしました。

三本木原国营開墾事業と

溝口三郎氏

後に初代十和田市長となった水野陳好氏の書面103回、面接276回の陳情もあり、昭和13年(1938)三本木原開拓は国营開墾事業となって、溝口氏が初代所長に就任しました。溝口氏の国营開墾事務所長としての任期は1年余りでしたが、水野氏は著書『水野翁の懐古談』で「三本木原国营開墾が成功したのもこの人がいたから」であり、「奥入瀬川河水統制計画を内務省、建設省の技術者とともにまとめられたこと」が最も大きな功績であったとしています。奥入瀬川河水統制計画は国立公園である十和田湖の景観の保全に配慮するとともに、その水を水力発電や灌漑に利用するためのもので、これにより国营化のネックとなっていた十和田湖の景観問題も解決されるにいたりました。

国营開墾事業の▶  
稻生川用水路巻き立て工事の様子。  
(昭和14年頃)



◀昭和19年5月27日通水式当日における取水口開扉の様子。(右・農林省耕地課長溝口三郎氏/左・農地開発営団理事長村上龍太郎氏)



▲溝口三郎氏。長野県生まれ。農学博士。昭和13年初代三本木原国营開墾事務所長に就任。後参議院議員として国政に携わる。(写真提供：国営技官・故塩畑品之助氏の三女村山康子さん)

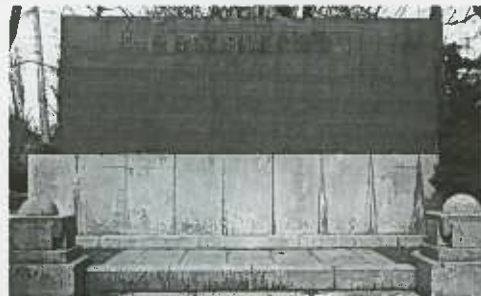


『兩邨 水利史談』(溝口三郎 編/昭和23年 雄鶏社出版)▲当時、他にも『開拓論』『土地改良』の二冊の著書が同出版社より刊行の予定となっていました。

開拓の先人たちへ

感謝をこめて

溝口氏は本書の前半で、全国各地の開拓に心血を注いだ先人たちのしるし、人柱となって用水路事業を成功に導いた人の話など、様々な用水路開削にまつわる伝説22話を掲載しています。そしてそれに続く後半に「(附)三本木原開墾記」として新渡戸傳翁から始まり、国营開墾事業に受け継がれた三本木原開拓の歴史を紹介しています。「新渡戸傳は三本木原開拓の大恩人である。三本木原と新渡戸傳とは、その名二にして一、離るべからざるものがある。」溝口氏は著書の中でこう述べています。三本木原開拓を新渡戸傳から地域の人々へ、そして国营開墾事業へと脈々と受け継がれたものとして、時代が変わっても感謝とともにその志を受け継ぐことを忘れないでほしいという願いを込めた書といえます。



◀太素塚境内にある三本木原開拓記念碑。昭和25年稻生川護岸工事と稻生橋の整備完成を記念して溝口三郎氏の撰文により、三本木町稻生川普通水利組合が建立したものだ。

昭和24年

高松宮が国营開墾を視察

終戦後、敗戦に落胆する国民を励ますため皇族の方々による国内視察が多く行われました。昭和24年(1949)高松宮殿下は三本木原国营開墾事務所を訪れ、事務所前に松の記念植樹が行われました。



▲植樹風景(お手伝いは塩畑技官)



▲事務所(現官庁街通り)前での記念撮影

### ありがとうございました

- ◆十和田市在住の農学博士・土崎哲男さんより著書「環境を守る森と水と土ー自然との共生なくして人間生活は存在しないー」1冊を寄贈頂きました。
- ◆十和田市役所勤務の佐々木淳一さんより先祖の歴史をまとめた著書「続・佐々木氏一族のルーツをたずねて」1冊を寄贈頂きました。
- ◆市内在住の花巻惣吉さんより福寿草を寄贈頂きました。春の訪れを告げる花は2月中首都圏から来館した観光客の目を楽しませていました。



### 関連情報

●十和田エイト・ライン企画あおり二大湖めぐりシャトルバス(ウインターロマン号)来館  
十和田エイト・ライン観光協議会企画によるシャトルバス・ウインターロマン号(十和田湖～奥入瀬～新渡戸記念館～三沢空港コース)により2月9日～25日に122名の観光客が来館されました。



今年度の十和田エイト・ラインPRポスター

#### ●青森県立郷土館協議会委員に新渡戸館長就任

この度青森県立郷土館の運営について協議する県立郷土館協議会委員に当館新渡戸館長が就任し、平成15年10月までの任期を務めることになりました。

#### ●「青森県博物館ガイド」を当館にて販売中

青森県博物館等協議会では県内の博物館関係施設を紹介する「青森県博物館ガイド 改訂第4版」を出版、当館でも700円で販売しています。



#### 〈編集後記〉

明治3年傳翁が三本木原開拓を国営で、との願書を提出して幾星霜、水野陳好翁の陳情が突り国営開墾として再出発しました。その初代所長溝口三郎氏を紹介することができました。太素塚入口左側の開拓碑文に思いをいたしつつ…

#### ●(社)上十三広域農業振興会広報紙「やませ21」に当館紹介

「やませ21ーやませ気象を生かした広域的な先進農業の確立をめざしてー」第42号に十和田市の基盤をつくった三本木原開拓の歴史と、農学博士新渡戸稲造の足跡を伝える記念館として紹介されました。

#### ●三本木原開拓記念館構想検討委員会開催

十和田市が整備を検討している三本木原開拓展示施設「(仮称)三本木原開拓記念館」の構想検討委員会が発足し、新渡戸館長が委員となりました。当館並びに市郷土館、三本木原開拓沢沢農場文庫にそれぞれ所蔵の開拓資料をどのように有効活用すべきか検討が進められ、3月上旬に報告案がまとめられます。

#### ●東奥日報のマンガ「ねぶたマンのあおり探検」で三本木原開拓を紹介中

東奥日報に連載中の青森歴史マンガ「ねぶたマンのあおり探検」(弘前市・くれみちげん作/現在土曜朝刊に掲載)では平成14年1月13日より三本木原開拓の歴史をたのしく紹介しています。



東奥日報紙面より

### 活動報告

#### ●館長講演会

1月22日六戸町立六戸中学校2年生の総合学習「私と日本と世界」における講演会で新渡戸稲造の生涯・功績についての講演を行いました。

#### ●館内展示解説板の英訳完了

十和田国際交流協会翻訳ボランティアの協力で館内展示解説板の英訳が完了しました。

#### ●博物館実習生1名受け入れ

2月28日～3月10日に北里大学獣医畜産学部4年生寺崎祐介さんが学芸員資格取得にかかわる実習を行いました。

#### 発行 太素顕彰会

十和田市立新渡戸記念館  
〒034-0031 青森県十和田市東三番町24-1  
TEL (FAX) 0176-23-4430  
E-mail: nitobemm@hi-net.ne.jp  
http://www.towada.or.jp/nitobe/

印刷 有限会社 岩間印刷所